

楊 夢（ヨウ ユメ）

中国出身

日本女子大学 人間生活学研究科 博士課程

その後の思考

今回の ON2022 で、皆さんの経験や考えに関するプレゼンテーションを拝聴して、とても有意義な時間を過ごしました。その後、今回のイベントの全体を振り返ってもう一回考えると、また新しい感想や考えを得て、改めて「ジェンダー」という課題の面白さを感じました。

・ジェンダーに関する考え方：なぜ、女性主体？

私は常に女子大の学生という身分を意識して生活しています。その故、常に女性視点、フェミニズム的な面で思考する癖があります。今回の発表資料を作成するときにも、つい女性の「弱い立場」を特徴としている「女性貧困問題」が一番最初に浮かびました。ジェンダーを言うとすぐ女性が受けた差別や不公平な待遇とつなげたら、「ただの男性嫌悪なのでは？」と思われるかもしれない、心配しながらパワーポイントをつくりました。しかし、実際に皆さんのジェンダーギャップに関する観点を聞いたら、「女性」に注目する方が圧倒的に多いと感じました。蜂谷代表理事の昔の仕事の場の経験からはじめ、皆さんの母国の現状に対する考え方や就職、留学、研究で体験するジェンダーギャップのほとんどは女性が中心であると気づきました。それはなぜだろう？ 改めて考えて、やはり歴史的な原因は避けられないと思いました。古来、家庭や集団の構成や分業は身体的・心理的な生まれつきの差から決められ、その後、

「伝統」、「決まり」のようなものが形成し、長い歴史の中で定着化しています。典型的に、男は外出して働き、女はうちで家族の世話をするという家庭の構成があります。その故、我々の祖先は息子に狩りや漁り、さらに学校で算数や文章を書く方法を教え、娘は家庭中心のため学校に行かなく、その代わりに掃除や洗濯、衣服をつくる技能を学びます。しかし、現代になると、科学技術や経済の急速や発展とともに、思想も非常に速いスピードで進歩し、女性は家庭だけではなく、十分な教育を受け、自由な選択権を持つべきという、男女平等やフェミニズム、ダイバーシティの提唱者は輩出しています。とはいっても、最初もこれらの提唱者の多くは、非常に先進な思考様式を持ち、(思想の)高いところに立っている少数者と思われます。数多くの我々一般人の思想は、そんなに速いスピードで進まないし、既存な考え方との矛盾でなかなか受け入れられないことが多いです。その故、先進思想は急速に発展しても、社会全員の思想の変革は同じスピードで進むことはなかなか難しいと思います。よって、今はまだ完全に平等とは言えないという現状で、女性はまだ立場が弱く、差別やジェンダーギャップの「被害者」側になりがちだらうと思います。

・では、男性は？

私は、ジェンダーバイアスやジェンダーギャップが存在する以上、男性が優位だとしても、その逆ねじを食らわなければならないと思います。

例えば、「女は結婚したら専業主婦になって家事をするべき」という観点を持つ男性は、家族全員の生活費のために人一倍に働くしかありません。また、「育児は母親のこと」と思う父親は、子どもとの深い愛着を作られず、子どもの尊敬をなかなか得られない例もあります。彼らがもっているバイアスは彼らによくない影響も与えています。

今回のイベントを通して、ジェンダーギャップは、平等や差別など大きなテーマと関連し、今やまだ個人から全社会までの努力が必要だと痛感しました。私は今後も一人の女性、そして一人の研究者としてジェンダー問題の解決に貢献したいと考えております。

以上